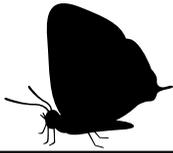


体験シリーズ



ゼフィルス採卵日記

渡辺展之

きれいなチョウの成長過程を封入した樹脂標本をつくろうと始めたゼフィルス（シジミチョウのこと、以下：ゼフ）の採卵も3年目になりました。毎年少しずつやっているせいか、なかなか種類がそろわず、2003年こそは石狩平野で見られる18種類を全て採集しようと決意しましたが…。ここに書いた日記の内容は、もう1年近くも前のことになってしまい、2004年の採卵シーズンがはじまろうとしています(笑)。



1月某日

大寒をむかえた1月下旬。ゼフの飼育にかけては日本で5本の指に入るといわれる小高さんに採卵方法を伝授していただく。実習場所は札幌郊外のとある二次林。ゼフの好む環境はミスナラの多い若い林（ミスナラに生むものが多いので）である。送電線の下や、バブルの時期に宅地造成が計画されそのまま頓挫した疎林が絶好の採卵ポイントであることを教えてもらう。なるほど納得。木に登り高枝切りバサミを使って先端の枝を切っては採卵していく。小高さんいわく、「多い年は数百採れるけれど、今年は10分の1以下だね」とのこと。結果は、正味2、3時間採卵して自分では両手で数えられるほどしか採れなかった。小高さんのご厚意で採った卵をすべてお土産としてい

ただく。それにしても採卵はじめてここ数年。ずっと凶作というのはどういうことなのだろう。3時間かけてアイノミドリシジミ16卵・ジョウザンミドリシジミ9卵・メスアカミドリシジミ1卵（ほとんど小高さんが採ったもの…）。



4月某日

気がつけばもう4月の中旬。出かけようと思っていたら、もうこんな時期に。小高さんに行った1月の採卵で、今年は凶作らしいことが判明して以来、どうも腰が重くなっている。しかし、気温も上がってきたし、もうすぐ葉の展葉が始まってふ化してしまうので気を立りなおして採卵へ。あまり寒い時期に採卵にでかけるとすぐに寒さでやる気がなえるのに対し、暖くなった時期



ササの葉に止まりお休み中のジョウザンミドリシジミ



オナガシジミはハネの表面に光沢がないタイプのゼフ（飼育したもの）

の採卵は採れなくても気持ちがいい。まずは、自宅近くの札幌西部のとある林へ。まだ、採卵したことがないものを狙うことにしてオナガシジミを探す。オナガシジミの食草はオニグルミで、川沿いに生えている若いオニグルミが狙い目である。ほどなく手ごろな場所を見つけて採卵開始。明るい開けた場所に生えた木の横に広がる枝先の頂芽付近を探すといきなり発見する。芽の5cmほど下の部分に1mmほどの卵が生みつけられていた。やっぱり何回やっても見つけたときの喜びはひとしおである。幸先がいいと思いつつ探すとき次々に発見。しだいに大胆になり、ありそうな枝を見切りで切り取って採卵していく。8割程度の確率で卵はついていた。オニグルミの芽はミズナラなどと比べて芽が大きいので、木に対して申し訳なさがかなり大きい。1本あたりの頂芽の数からしたら、ミズナラの100分の1ぐらいだろうか？個体に与える影響も大きくなる。私のような採卵者が何人か押し寄せたら、あっという間に木は枯れてしまうのではと心配になる。1時間かけてオナガシジミ12卵。



4月某日

札幌の手稲山の麓で採卵。送電線の下は若い二次林でミドリシジミが好む開けた場所に生えた木が多い。また、定期的に伐採するので芽を採取しても罪悪感が少ないということで送電線下を目指す。しかし、若い二次林はあったが、ミズナラが少なく苦戦する。さらに少ないミズナラを確認していくも全く見つからず。場所を変えても見つからず。ミズナラがあっても優占していない場所だと個体数は少ないよう。これだけ、採集努力をしたのに一つも見つからないとは、今年が少ないことだけが原因では

調査館通信 24・25号(2004)

小さな発見・オニグルミは裸芽でない？

オニグルミの芽は裸芽であることは、図鑑にも書いてあるし、見てくればいかにも葉が折りたたまれているかのような形をしているので、当然そう思っていた。丁度採集したとき



は、展葉が始まろうとしている頃だったが、どの芽も外側の葉は開く前に脱落してしまっていることに気づく。脱落した後の芽には、折り畳まれた真新しい葉が顔を見せていた。どうも外側の葉は、すでに葉としての機能はなく、中の葉を保護するための芽鱗としての役割をもっているように見える。芽鱗は葉から変化したものと言われているが、オニグルミに見られる現象は、見た目は同じでも機能は分化していて、芽鱗となる途上の状況を見ているのかもしれない。裸芽をもつ他の樹木についても注意して見てみたい。

なさそうだ。近場で見つけようとしたのは怠慢だっただろうか。気持ちを切りかえ、オニグルミがあったのでオナガシジミを探すとことにすると20分ほどで10卵が見つかる。今年のオナガシジミは豊作なのかもしれない。結局、4時間ほどでオナガシジミ10卵だけ。

4月某日

この日はメスアカミドリシジミとウラキンミドリシジミというナラ属以外の葉を食べる種類を狙って札幌東部に採集。それぞれ

No	種名	主な食樹	産卵場所	採卵数	羽化数
1	ウラゴマダラシジミ	イボタノキ	日当たりの悪い小木	見つからず	-
2	ウラキンシジミ	アオダモ	木の太さ 3 ~ 20cm の日陰の根際や枝又	2 卵 (去年のもの?)	0
3	ムモンアカシジミ	カシワ、ミズナラ	幼虫は半肉食。林縁の独立した日当たりのよい木。クサアリとの共棲	見つからず	-
4	アカシジミ	コナラ、ミズナラ	コナラ林。休眠芽基部。	1 卵(頂き物)	0
5	キタアカシジミ	カシワ	カシワ林。地上 1 ~ 2m のカシワ 1 年枝。	見つからず	-
6	ウラナミアカシジミ	コナラ	二次林。2m 以下の幼木、ひこばえ。1 年枝基部や窪み。	見つからず	1
7	オナガシジミ	オニグルミ	独立した日当たりのよい木。休眠芽近く。	22 卵	9
8	ミズイロオナガシジミ	コナラ、ミズナラ、カシワ	1 年枝分岐部、休眠芽基部、小枝の窪み。	4 卵(頂き物)	0
9	ウスイロオナガシジミ	ミズナラ、カシワ	樹皮のめくれた裏側。枝の抜け落ちた窪みの奥に 2 ~ 20 卵	見つからず	-
10	ウラミスジシジミ	コナラ、ミズナラ、カシワ	日当たりのよい南向きのコナラ林。地上 3m 以内の張り出した下枝の休眠芽基部に 2 ~ 5 卵。最も見つけやすい	1 卵(頂き物)	0
11	ミドリシジミ	ハンノキ	湿地の林縁。直径 5 ~ 10cm 以下ハンノキに多い。小枝や幹に卵塊	探さず (前年採卵)	-
12	メスアカミドリシジミ	ミヤマザクラ	暗い環境に生えるミヤマザクラ。小木やひこばえ。地上 2m 以下の枝の裏側。	1 卵 (頂き物)	0
13	アイノミドリシジミ	ミズナラ、コナラ	林縁の大きな木。樹高 5m 以上の梢に近い生長のよい頂芽。	16 卵 (半分頂き物)	0
14	ウラジロミドリシジミ	カシワ	地上 2m 以下の下枝に多い。日当たりのよい枝は少ない。細く、貧弱な下枝の小枝分岐部や窪みに	30 卵	12
15	オオミドリシジミ	ミズナラ、カシワ、コナラ	樹高 1m 程度のコナラ幼木やひこばえ。日陰になる貧弱な木。太さ 2 ~ 3mm の細枝の分岐部。	見つからず (前年採卵)	-
16	エゾミドリシジミ	ミズナラ、カシワ、コナラ	分枝の多い太めの木。2 年枝以上の横枝の分岐部。日陰の北側の枝に多い。	見つからず	-
17	ハヤシミドリシジミ	カシワ	カシワ林。林縁の張り出した横枝や下枝、ひこばえを好む。地表すれすれの幼木にも産卵。小枝表面、分岐部、休眠芽基部	見つからず	-
18	ジョウザンミドリシジミ	ミズナラ、コナラ	林縁の張り出した横枝。1 年枝先端の休眠芽基部。	9 卵	0

れミヤマザクラとアオダモに産卵するが、ミヤマザクラは二次林に多くアオダモは発達した林に多いので、場所を代えながらの作業となる。最初はウラキンを探すが、まだ見たことがなく、教えてもらったポイント(木の太さ 2 ~ 20cm の地際・分岐部)を丹念に探す。見つからないと本当にあるのか、今年は少ないのかもとすぐに疑心暗鬼になる。けれど、めげずに探す…。探しはじめて 1 時間ほどたつてようやく発見。木

の太さ 3cm 高さ 4m ほどの木の分岐に 5 卵みつけ、すぐ上の幹にも 1 卵見つける。よく見ると卵に穴があいているものもあり、すでにふ化した後のようだ。しかし初めて見つけたものなので幼虫がいると思われる芽と一緒に採集する。すぐとなりの木にも卵を見つかるがこれもふ化後だったため、こちらの採卵はやめておく。

場所をかえてミヤマザクラはちょうど芽ぶきが始まったところで、すでにふ化してい

るかもと焦る。沢沿いに分布する採卵の絶好ポイントと思われたが探せど見つからずじまいに。結局、3時間ほどでウラキンシジミ6卵（うち4卵はふ化済み）。

その後、堀師匠 1 に事情を話したところ、「採集したウラキンの卵は去年のものでしょう。よく前年のものがよく残っているよ」と言われちょっとショックをうける。



4 月某日

天気がよく歩いているだけで気持ちいい。この日は札幌東部で、特に狙いをしぼらず散策しながら卵探し。しかし、かえってこういうときは見つからない。メスアカ・ウラキン・オオミドリなどを探すが見つからずじまい。

このまま終われないと思い、まだ見つけたことのないウラゴマダラシジミを狙って北海道開拓記念館前にあるイボタノキの垣根を探す。ゼフィルスのなかでも最も原始的といわれるウラゴマダラシジミの卵は他の

ミドリシジミの産卵位置



種と違い、色は茶色っぽく形は扁平である。「とても見つけやすい」という本の説明に楽観的になっていたが、100m 以上もつづく垣根を探せど見つからず。人通りの多いところで通行人には不審そうに見られるし、かなりの敗北感。4時間ほどかけて収穫なし。



5 月某日

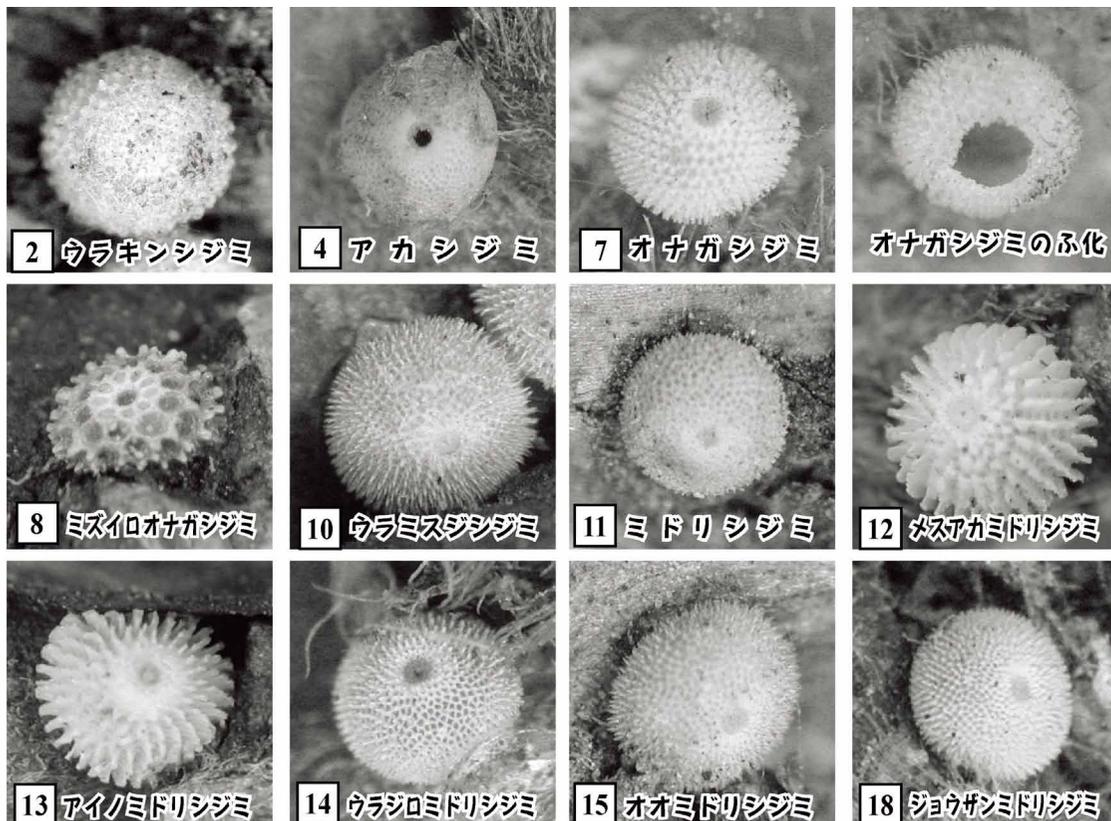
これまでに採集した卵の拡大写真を撮るために、野幌のふれあい交流館におじゃまする。Nikon 製の実態顕微鏡にデジカメをつないで卵の拡大写真の撮影を行なう。このとき、スタッフの浜本さんに知床の方から頂いたというゼツの卵をいただく。これが自分では採ったことのない種が多く、うれしさと同時にちょっと落ち込む。



5 月某日

すっかり暖かくなってしまい郊外のミスナラは展葉をはじめている。展葉の遅いカシワならまだ間に合いことを祈り石狩浜のカシワ林に行く。好天に恵まれて、外にいて気持ちのよい日だったが、すでにカシワは芽吹きはじめていた…。とりあえず、カシワを食べるハヤシミドリやウラジロミドリの卵を探す。これらは芽の付けねや1、2年生の枝の又に卵を産むが、海岸林のカシワは背が低いので手が届く場所が多くとても探しやすい。探しはじめて10分ほどで見つから

卵は基本は球形にトゲがついたようなウニの形をしているが、種類によるバリエーションが大きい。



撮影協力・野幌ふれあい交流館

れた。やはり樹冠が空いた場所の周辺の木に多くついているようで、次々に発見。すでにふ化したものも多かったが、ウラジロミドリを中心に約 30 卵。



採卵後

採卵も終わってよいよ飼育を始めましたが、オニグルミやカシワの芽は街中では手に入れにくく、水さしても持ちが悪いものすぐにしおれてしまいなかなか苦戦。エサをきらしてぼやぼやしているといつのまにか消えていたり（多分どこかで亡くなってしまったのだろう…）、小さいうちにさなぎになってしまうものもありました。掘師匠を驚かすほどの小さい成虫で羽化してしまい（エサが少ないから）、ぜつたちはさぞか

し不本意だったことでしょう。採卵から羽化までの成績結果は、表のとおりで散々たるものでした。頂いた卵をちゃんと成虫にかえすことができなかったのは申し訳ないかぎりです。

飼育をしていると、幼虫の期間は 1 ヶ月ほどなので、毎日の成長が目に見えてわかるので楽しく、また卵から幼虫、さなぎ、成虫へと変化していく様子をいろんな種類で比べながら観察していける面白さがあります（ちゃんと飼育にすればなおさら）。もともと、封入樹脂用の標本を採るために始めたものですが、プロセスの面白さにはまってしまった感じです（苦笑）。標本はなかなか揃わずじまいなので、来年も再チャレンジになりそう。採卵をはじめたここ 3 年